

## 講演 2

## イマーゴ・ウルビス： ローマおよび京都の神話と歴史のあいだ

フランチェスコ・リッツァーニ<sup>i</sup>， ラウラ・リッカ<sup>ii</sup>， 野村 優<sup>iii</sup> 訳

### 1. ローマと京都を並置する理由

都市は、とくに遠く遡る歴史をもっている場合には、都市化された物質的な複合物というだけでなく、なにより（そして逆説的に）非物質的な存在、つまりは、歴史における人間の関係性の反映でもある。トゥキユディデスは、アテネ市民に対する演説においてニキアスに次のように語らせた。「城壁ではなく、人びとこそが都市である」（ペロポネソス戦争、Ⅶ、77章、7節）。実際に古代西洋の都市は、なにより記憶のパリンプセスト palimpsest<sup>1)</sup> であった。それは、記憶のあつまりを残す場所、つまり、まさにラテン語の“*monumentum*”という単語が意味するように、歴史のおよび神話上の過去に言及する〈モニュメント〉の集まりであった。この単語は過去の多くの実例から判断すると、“覚えておくこと”“思い出すこと”だけではなく“警告すること”をも意味する動詞 *monēre* から派生している。〈モニュメント〉は元来、過去を保存するためにつくられるイメージ（ラテン語のイマーゴ *imago* は、“イメージ”または“デスマスク”を意味する）であり、記憶というだけでなく、未来においてならうべき模範でもあった。想起したり訓戒したりする力だけでなく、それらが蓄積されることで未来においても増幅されるような、神話的な力を持つイメージによって表現された記憶の都市であるという意味において、古代ローマは「卓越」*par excellence* したモニュメント都市であった。別の神話をうみだす神話——これこそが「イマーゴ・ウルビス」（*imago urbis*）の意味である。そして、それをローマで完璧に体現していたのがカピトリヌス<sup>2)</sup>、つまりは、まさに古代と近代においてローマ市民意識 *civitas* の理念を想像上に具体化したローマのアクロポリスであった。カピトリヌスは暗黒世紀の経過によってローマのモニュメントがもっていた本来の目的による記憶さえも削除されたときには、誤って元老院議員や皇帝権威の座だと考えられていた。しかしながら、神聖ローマ帝国体制の印章を規定したボヘミア王カール四世の金印勅書（1356年）において、中世のカピトリノ<sup>3)</sup> のイメージは、ローマの中心とされた。

金印勅令において、カピトリノは、ドイツのみにおいて政治的に存続しているに過ぎなかった神聖ローマ帝国のシンボルの役割と、そして、その帝国の完全なる中心の役割を果たしていたとされる。また、中世において明らかになったように、印章の中心にみられる元老院宮殿は、古代のタブラリウム（*Tabularium*：ローマ共和国の「公文書館」）をもとに築かれたものであった。そのために、その当時には、起源となった地理的状况から完全にかけ離れたものであったが、実際に「新しい」中世の宮殿は、帝国の「都市と世界のへ

<sup>i</sup> イタリア文化財・文化活動省、エスペリア（芸術・歴史遺産のマルチメディアプロジェクト）キュレーター

<sup>ii</sup> ボローニャ大学高等研究院都市研究所、リサーチ・フェロー

<sup>iii</sup> 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程



図1 金印勅令 (1356年)



図2 ミケランジェロのカピトリノ広場

そ」(*umbilicus urbis et orbis*)の役割を果たした。つまり、この中世の建物は、理念上の帝国のシンボリックな中心地であった。これが、イマーゴ・ウルビスの創造的な力の一例である。二世紀のちにミケランジェロは、元老院宮殿の前に、180度回転させて理念的な都市の四角形の空間を建設し、これによってカピトリノの趣意を新たなイメージに生まれ変わらせた。こうして、かつては封じ込まれていたローマのフォルム（古代都市<sup>4)</sup>）が、過去の廃墟を抜け出し「新たな」キリスト教都市の方向へと動き出した。しかしながら、ミケランジェロはウンビリクス・ウルビス *Umbilicus urbis*（ローマの中心）、そして、全てのミリアリウム・アウレウム *Miliarium aureum*（「黄金の里程標」<sup>5)</sup>）という、フォルムに沈着した中心性の古代シンボルを忘れることはなかった。それは、ウンビリクス・ムンディ *umbilicus mundi*、つまりは、宇宙の、そして、今やすっかり観念的なものとなった帝国の理念的な中心の場所を再興し、そして更新するものであった。

これまでに確認してきたように、ここには切れ目のないネッサンス期のローマから中世のローマへの、そして、このあとにみるように都市創造者の儀式的行為が行われた古代のローマへの、年代というより起源の参照における連鎖がある。そして、この全てが、数百というより数十メートルのなかに収まっていた。ここには、トゥキディデスによる「人びとこそが都市である」という叙述に含まれたアイディアの最も明白な証拠がある。まず、都市とはシンボリックな表現であった。そしてさらには、まさに都市はひとつの“*symbolon*”であること、つまりは古代においてこのギリシャ語の単語が文字通り意味していたように「まとめる」ことでもあった。いうなれば、まるで中国での三位一体にみられるように、人と天と地の結合点であった。ここで、われわれは極東世界との最初のつながりを得ることができた。しかし、ロムルスに戻る前に、地理的、または都市論的、あるいは、それ以前に歴史的観点からさえかけ離れている二つの都市を並置することを、どのように正当化するのかという、見出しに示した疑問に戻ろう。

それら二つの都市が共通して持っている例外的な特徴が、すべての距離を取り消す可能性がある。いまやそれらは他にはなくなってしまった、現存している古代帝国の首都、つまりは、その起源が都市や最初の都市生活と一致する首都であった。言いかえれば、その都市と、国家や歴史といったものの起源が一致する首都であった。ただし、考古学的事実としてでなければ、壊すことのできない継続性をともなって生活することや、起源の本質的な部分を維持することに、同じ時代の都市も今日では達している。そして、ローマもさることながら、東洋の京都は、時間の観念において一種の永遠の現在とみなされる進行をするギリシャ＝ローマよりさらに循環的であった。このことは、日本の都市の画像を見ることによって理解することができ



図3 現代の京都

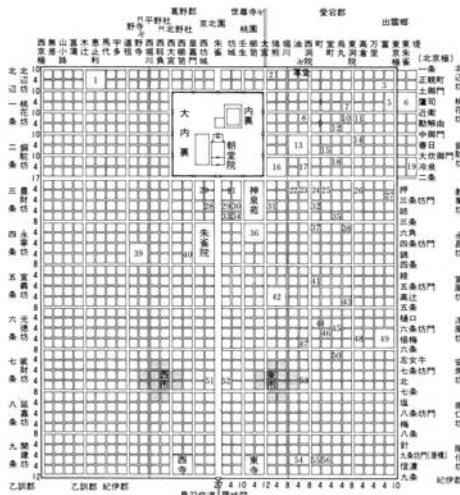


図4 古代の京都



図5 伊勢神宮：千木および経木は、中国の影響以前の古代日本の建築（神明造）の典型

る。実際に、京都の網状直交システムは、御所の周囲の根本的に変化することがなかった都市デザインとして、現在の道路図にいまだに申し分なく見出すことができる。

つまり、それは、継続的な活性化に応じて肌が入れ替わりながら、それだけに構造においては全く同じとなっている身体のようなものである。対照的にローマは、中断されつつも、前のものを含みながら新しいイメージへと再開し変容するもの、すなわち、各年輪が歴史の層に対応する大樹の樹皮になぞらえることができる。ここでは中国の影響による最初の都市化が進展する以前の日本のはじめての首都が、より適切に表現するならば天皇の権威の宿る場所が、おそらく儀式的浄化のために、天皇の崩御に際して取り壊され、新たに別の場所に同じ形態で再建されたことを考慮する必要がある。これらすべては日本で生まれた宗教的な伝統である神道の儀式に根差している。そして、その最も驚くべき実演は、昇る太陽と天皇家の祖先の神々を祭る神殿の周期的な破壊と再建がおこなわれる伊勢神宮である。

原始的な小屋を想起させ、そして、その起源が歳月を避けた「まったく独自」 *sui generis* で古風な種類に属する、これらの建物は、おそらく二千年来、二十年ごとに取り壊され再建されてきた。そして、その儀式は、国家行事に相当するものとして今日でも報道機関やテレビ局を動員しながら、まったく同様に繰り返されている。そして、画像からも分かるように、社殿は見られることから隠すために当初から柵に囲まれていた。いうなれば、その場所は、そこに宿る神々のためにとっておかれた保護領域であった。そして、これほど西洋の時間と歴史、つまりはモニュメントとその保護という概念とかけ離れたものはない。

途切れることのない連続性はさておき、ローマと京都は計り知れないと思えるくらいに異なる二つの都市であるという全くの偶然性を認めるべきだろう。実際に、それらが住宅や都市、文化、宗教、さらに政治の観点での対立する原理の表れとして、正反対

に位置するというだけでまとめることができる。そしてもちろん、対立するという事実が、両都市へのアプローチと比較を可能とする圧倒的に魅力的な視点を可能にする。

事実、ローマと京都を並べることは、二つの都市のみならず、もっとも直接的な意味で、そしてトゥキユディデスのことばにおける意味で、対立する普遍的な都市モデルを並置することでもあった。実際に、中央のフォルム、あるいはアゴラとも、また広場とも呼ばれた、議論によって行政長官を選ぶために人々が集まった場所をもつ西洋の「ポリス」*polis* のもっとも完全なモデルであるアテネに重ね合わされて、ローマは理解されている。しかしながら、一方の京都は、東洋の都市の起源の面影をいまだに留めている。それどころか、歴史上に最初にあらわれた都市の起源そのもの、つまりは、メソポタミアとクレタから中国までのコロンブス以前の文明のなかで初めて立ち現れた「宮殿都市」*palatial city* であった。そして、それは祭祀王の宮殿と神殿と倉庫をあわせた建物を擁する、大きな円形か正方形のエリアをもつものであった。したがってローマと京都は、対立する二つの政治原理に基づく二つのモデルに相当するものであった。そのうちで、西洋のものは「立憲的」と定めることができ、そして東洋のものは「絶対的」と呼ぶことができる。たとえ例外的な事実であっても、結局のところ二つの都市の間のたった一つの共通点は、その大なる古さによって、しかしながら異なる方法において、その都市自身の誕生にもかさなる先史時代から有史時代への移り変わりの記憶を持ち続けていることである。それこそが、それら「最初の都市」であった。

これで、都市の二つのモデルが反対に位置する理由は、ただそれらが対をなすという明確な証拠によって、明確に示すことができたであろう。しかしながら、この論文の最後では、無形の領域に根差したシンボルの驚くべき偶然の一致によって、他のいかなる違いよりも強い、二つの都市のイマーゴ・ウルビスの同一性が明らかになるだろう。ただし、必要とされるいくつかの中間ステップを経由せずに、それを発見することはかなわない。そのために、ローマと京都を究極的に並置することに関しての、もっとも大きな驚きをとってにおいて、これまでに素描してきた道筋が始まる場所を見きわめるために、ローマへと戻ろう。ローマのイマーゴ・ウルビスは、世界の中心、さらには、宇宙の中心の紋章であったことを確かめてみよう。

## 2. ローマ：シンボルの起源と起源のシンボル

日本のみならず、ローマの歴史もまた小屋から始まる。パラティヌスの丘<sup>6)</sup>にあるこれらの小屋は、昔の歴史家、そして、現代の歴史家の両方からローマの出発点と認識されている。ただし、多くの歴史学と近代の考古学において、これらの小屋は、その丘の他の近くの小屋と同じように、点在していた鉄器時代の入植地の遺構を明らかにするだけに過ぎないとされていた点で日本の小屋と違っていた。また、そこは、紀元前七世紀末からのエトルリアの盟主タルクイニウスの時代まではローマと呼ばれることもなかった。それ以前の時代においては、ただ、よりひろい居住地域がローマと呼ばれる可能性のあった都市の形態をかたちづくっていた。そして実際に、石の建築物や記念碑や複雑な公共事業、そして、たとえ対立するものでも異なる社会階層がすでに十分に有機的に連結した社会的な組織を備えたものこそがローマであると考えるのであれば、エトルリア王たちの偉大な時代以前には、



図6 パラティヌスの丘にあった小屋の復元図



図7 ローマのセンプティモニウム

そうしたものは存在しなかった。しかし、周知のように、古代人は、そのようには考えなかった。古代人にしたがると、ある地域を囲む壁を建てることは、とても重大であるのみならず、儀式的な創設であった。誰もがみとめるように、それこそが、紀元前753年4月21日、パラティヌスにローマを創設したロムルスに割り当てられる古代の言い伝えである。つまりは、ロムルスによる「スクエア・ローマ」の創設にあたる。

もしも、伝説の年代と考古学的データを交差させるならば、ロムルスによる創設は、古代人がセプティモニウム（*Septimontium* 七つの丘）と呼んでいた、すでになりに発展していた原始的かつ有史的な時代条件の地域と特定することができる。この入植地は点在する村々の集合体以上のものであって、とても発達した「指導者の地位」の特徴を表していた。

さらには、紀元前八世紀中頃には、イタリア半島のヴィッラノヴィアーニ人 *Villanoviani* の入植地を超え、250ヘクタールの面積を越えるまで広がっていた。ロムルスによる「スクエア・ローマ」と、すでに定住がおこなわれ、ある種の連合として整理されていたより広いモンテス (*montes* 「七つの丘」) 地域の広がりの違いは、伝統的な物語と歴史的事実の和解させることのできない矛盾とみられる。しかし、この矛盾は、ただ伝説に含まれる主要なデータを、つまりは、ローマ創設のシンボリックで聖的な意義を考慮することにより解決することができる。

アンドレア・カランディーニは、まさにそれを最後までやりとげた。ほかのすべての革命と同じように激しい抵抗をうみだしながらも、このイタリア考古学の天才によって、ローマの起源についての考古学および史学的な研究における急進的な革命がもたらされた。タキトゥスがすでにその時代にロムルスの壁と記述していた遺構が25年前にパラティヌスの丘のふもとに発見されたあとも、かすかにシュリーマン<sup>7)</sup>にも似た、この著名な学者は、非常に真剣に古い伝説上の伝承を取り上げた。この掘り出された遺構には、壁の最初の拡張に際しての不可侵性を破る贖いのための生贖の証拠であるとみられる人間の骸骨があった。ここから、古典的研究の領域で依然として優勢な多くの偏見に反して、カランディーニはローマ文明の幕開けの全容を再構築してみせた。たとえ簡潔にでもカランディーニの主張を再構築する余裕はないが、彼の試みは「ロムルスの伝説」の基本データを確かめることであったといえは十分だろう。そして、それは、本日でもまだ都市の「創設」とよんでいる、古代人がもっていた宗教的に重要な儀式によるイベントであった。

古代人にとって、このイベントは、量ではなく、なにより質に関することこそが問題であった。そして、とくにエトルリア・イタリア世界では、ギリシャのものとは異なる、非常に特色あるイベントを設定するものとなっていた。いうなれば、神話的というより、むしろ儀式的なイベント、語り方というより、むしろやり方にこそ特色があった。そしてローマの場合は、大きな原始的都市段階の入植地内部における、儀式的に聖別された空間の書き出しとして簡潔に設定することができる。それが何であるかについて理解するために、ことばの意味からはじめよう。では、「創設する」(“to found”)は何を意味するのか。

「創設する」はラテン語では *condere* と書かれた。この単語は、イタリア語の単語「隠す」(*nascondere*) とルーツを共有する。そして、またラテン語でも、この基本的な意味を含んでいる。*condere* は、本質的には「貯蔵する」「確保する」「保護する」「隠す」、そして最後に「地面の下に置く」「埋める」ことを意味する。これは、都市が「創設」されるときに、本質的に何が起こったかを示している。特別に掘られた穴に、領地からの初収穫が投げ入れられて埋められた。資料によると、初収穫は、その都市の貴族の領地の様々なところから、つまりは初期のクリエ・センプティモニウム (*Curiae of the Septimontium*) からあつめられていた。また、資料は「スクエア・ローマ」が、通常に理解されているように、ロムルスによってパラティヌスに創設された都市であっただけではなく、祭壇と創設の穴をもつ小さな地域でもあったことをもの語る。そして、それらは、必ずしもオリジナルではなくコピーのこともあった。ここでイマーゴ・ウルビスの神話生成のメカニズムに注意をうながしておく、起源の場所であることではなくて、そのシンボリックな価値こそが重要なのである。ローマの起源の異なる諸層が要約されている、ファビオ二世の邸宅にあるポンペイ壁画の複製品には、まさにロムルスによってパラティヌスから、占拠される以前のアウエンティヌスに投げられた槍が横たえられた祭壇が描かれている。このような方法で「スクエア・ローマ」を理解することは、ロムルスにかかわる主要な他の場所 (ロムルスの住居小屋 *Rasa Romuli*, そしてルペリカル *Lupercal* オオカミが乳を飲ませた洞窟) をモニュメント化することであった。また、それを行ったアウグストゥスは、パラティヌスにある居住兼聖域内部に、「スクエア・ローマ」を建物のなによりの要としながら、再現した人物でもあった。

しかし、儀式の手順全体によって確立された上位世界 (天国) とこの世の世界 (初収穫をとめない、都市がおこされる土地)、そして最後に、地下世界 (創設の穴がつながっている、黄泉の力の場所) の間の複雑な関係性こそが、われわれの興味をひく全ての疑問におけるポイントであった。その中心が人間と都市に基づいた、垂直のアクシス・ムンディ (*axis mundi*) において、創設の全プロセスは果たされる。そして、これからみるように、それは西洋においてだけではなかった。

最初に、エトルリアの儀式は、司祭が鳥の飛行を通じて神聖な保護 (*auspice*) を行った (*auspicium* はバードウォッチングを意味する *avis-spicium* に由来する)、視覚による領域の区分を取り入れたものであった。儀式的に神聖なジェスチャーによって定義された天上の区域は、そのなかで飛行の観察がおこなわれる空から切り取られた観察空間として、テンブルム・イン・アエレ *templum in aere* と呼ばれた。それに対応して、地面に、地上のテンブルム *templum* と呼ばれた、一揃いの境界石を含む天上の観察を制限された地域があった。この種の観察を通じて、ロムルスの場合のパラティヌスのように、創設者が村をつくらうとした地域も区画された。最終的に、創設者の意志が神意にそっているかどうかは、観察結果によって判断された。そして、ここでの天上と地上は、創造過程初期段階では深く関わっていた。要するに、こうした儀式は永遠に閉じられる穴に最初の収穫をおさめる儀式に従っていた。そして、これが *condere*、つまりは「隠す」行いであった。

しかし、第三の次元、つまりは地下世界との関係は、また別の形態で表現された。天上の兆しを見いだすだけでは、鳥占い師 *angur* による場所の「落成」



図8 ローマの創設の穴 (fossa) の祭壇 (Ara)



図9 都市創設：sulcus primigenius

「都市創設」は、創設の壁として機能する畝である。そして、それは、囲まれた区画の外側にいる白い雄牛と内側にいる白い牝牛にくびきをかけながら、青銅の鋤によって、未来の扉と暗合せられる刃の上げ下げによる鋤の特徴的な操作によって、掘られなければならなかった。ウルブス *Urbs*（ラテン語の「都市」「町」であるが、とくにローマの中心地を意味する）と名付けられた、ロムルスによって実行されたこの神聖な行為こそが、つまりは文字通り「鋤によって創立された都市」の由来になっている。事実、ウルブスは *urvo*、つまり「鋤でなぞる」に由来する。さらに、それは英語の形容詞「urban」のルーツであった。

どうして、セプティモニウムと、より小さなロムルスのパラティヌス・ローマの寸法の食い違いは見かけだけのものであり、克服できるものであったかは、いまや明確であろう。ロムルスとされる、この歴史上の人物が、パラティヌスの丘に、儀式的に奉献された、より拡張された原初段階の都市の神聖な政治的な中心をつくった。それどころか、センプティモニウムは、速やかに効果的な地政学的役割を取り戻した。このことは、起源の谷において、パラティヌスの中枢であった、さらに詳しくは、都市の聖火を守護するウェスタ *Vesta*<sup>8)</sup> に関する聖域をそなえた原始の *Regia*（王の家）であった、非常に重要な政府建築物のフォルムでの速やかな移動によって示すことができる。（それは、ロムルスの後継者、ヌマ・ポンピリウスの治世と特定される。）フォルムは、文字どおりに「外」を意味する、そして、それは「パラティヌスの外」とみなすことができる、しかしながら昔のセンプティモニウムの地域の中心は、ロムルスによって統一された。この時から、アウグストゥスで頂点に達するものであり、また、都市の宗教的かつ市民的シンボルを徐々にフォルムとアクロポリスのカピトリヌス<sup>9)</sup> に移動させるものでもあった、パラティヌスの丘の「モニュメント化」が始まった。



図10 「ローマの都市のへそ」

（“inauguration”）の必要条件に対する保障として十分ではなかった。「落成する」ためには、その場所は、まずエファトゥス・エト・リベルタス *effatus et liberatus* でなければいけなかった。つまりは「特別な言葉によって定義され」（*certis verbis definitus*）、そして、それを占領していたネガティブな神性存在から解き放たれたもの（*liberatus*）でなければならなかった。これらのネガティブな力は、その本性によって地下世界と結びつけられる。そして、この点においてのみ「都市創設」（*sulcus primigenius*）の発掘を始めることができる。

それは、都市としてのローマの隆盛と対応し、その偉大な都市開発を促進する期間であったタルクイニウスの時代に起こる。しかし、これは、その大きさによって真の再創設というかたちをとった、事実上の都市的および政治的な再構築であった。したがって、新憲法とローマの新しい都市の顔の生みの親であることにより、新しいロムルスであったセルウィウス・トゥッリウスが、パラティヌスからカピトリヌスの麓へ、つ

まりは都市のオリジナルで普遍的なシンボルの、あるいは、いまやムンドゥス *Mundus* とよばれ、ウンビリクス・ウルビス *Umbilicus Urbis* を目的とする創設の穴のフォルムへ、移転させたことは偶然ではない。しかし、それは実際には文字通りの複製ではなかった。その穴は、地下世界との一種の浄化のやり取りを可能にするために、年に三回開かれる予定の本当のテンプルム・サブ・テッラ *templum sub terra*、つまりは地下世界の寺院となった。

再び、人間の共同集団のバランスを保つために、地下世界と地上の世界、天上の世界の間の垂直軸が重要となる。我々は、そこへと避けがたく戻っていくべきアクシス・ムンディ（世界の軸）の原型とつながっている。そして、いま述べているテンプルム・サブ・テッラが、「世界」「宇宙」という二つの意味を持つ名詞、あるいは「純粋な」「清浄な」という形容詞として理解されるムンドゥスと呼ばれるのは偶然ではない。フォルムのムンドゥスとロムルス（注）の創出の穴を大きく取り違えたプルタルコス（注）は、都市の創設について次のように記述している。「彼らは、この穴をムンドゥス、つまりは天国に与えたものと同じ名前で呼んだ。そしてさらに、この地点を中心と考えて都市の周囲を描き出していた」（プルタルコス、ロムルス伝、II、1-12章、2節）

したがって、セルウィウス王と共和国の時代における都市地域の新たな中心は、それがまさにシンボリックな世界の中心という名前を設定され、そして、ギリシャ世界のアクシス・ムンディを横切るアポロン神殿にあるデルファイのオンパロス *Omphalos* にローマにおいて相当する、ムンドゥスであった。

古代ローマ人自身は、この意味で理解していたために、ウンビリクス・ウルビスは、ローマだけでなく、すべてのムンドゥス、つまり全世界の中心とシンボリックに一致するとみなされた。このために、ローマ史における「第三のロムルス」、つまりアウグストゥスは、世界のすべての道がそこからはじまる、黄金の里程標 (*Miliarium Aureum*) をその近くに置いた。

ローマの歴史は、帝国の創設者アウグストゥスとともに、ゼロからはじめられたとみなすことができる。実際に、彼はその文化的都市論的政策において、なによりもロムルスとローマの起源を彼自身と同一視した



図11 「黄金の里程標」



図12 デルファイ、アポロン神殿



図13 デルファイ、オンパロス





図14 カピトリヌスの雌オオカミ

ローマの再創設者だった。彼は、ロムルスとの記憶の近くに暮らす欲望に駆り立てられ、パラティヌスに邸宅を建てた最初の皇帝であった。2007年に、パラティヌスにあるアウグストゥス私邸の下で、ルベルカーリアと同一視されるニンファエウム（Nymphaeum；泉の神殿）の洞窟、つまり、伝統的に双子が救われた場所の代わりとなる聖域（雌オオカミ lupa が双子に乳を飲ませた洞窟）が見つかった。この最近の発見は、パラティヌスでもっとも複雑で迷宮のような宮殿であったアウグストゥスの住居が、彼によってどのように新たに再構築されたかを明らかにしてみせた。長年にわた

る国政 *Res Publica* (27a.C.) の再建および改革と並行して、アウグストゥスは、彼の私邸を、アントニウスと戦ったアクティウムの戦いで彼を保護した神であったアポロンの神殿を中心とした国家的住居および聖域へと改築した。その寺院の下層アーケードテラスの中央、つまりはアポロの森 (*the Silva Apollinis*) に、アウグストゥスは、ロムルスの小屋の近くに位置したローマの建国の穴をとまなう祭壇の、つまりは“ローマ・スクエア”の祭壇の新しいコピーを配置した。なぜ、その地点だったのか？なぜならそれは、その下に横たわるルペリカルと、アウグストゥス私邸の基礎が完璧に垂直に対応していた地点であったからである。“スクエア・ローマ”がローマ人にとっての彼らの歴史の始まりをあらわすならば、カピトリノの雌オオカミの古風なエトルリア青銅によって完璧に表現されたルペリカルは、その前史時代の記憶をあらわしている。

動物を、半分悪魔のような生き物として、ほとんど人間の特徴をとまなべて描いていた、この古代芸術の絶対的な傑作は、野蛮から文明生活へ、つまり都会への移行を完璧に表現している。そして、これはルペリカルで行われた古代の饗宴であるルペリカーリア *Lupercalia* の最も重要な象徴的な意味をあらわしている。アウグストゥス私邸全体の複合体は、このように、新しいアクシス・ムンディに依拠してつくられたローマの起源のモニュメンタルな再現としてあらわれる。それは今や、第三のロムルスの家を通して、アポロの天の領域からルペリカルの地下王国へといたる。われわれがイマーゴ・ウルピスと呼ぶものの別の示され方は、ここでは次のとおりであった。つまりは、特例的なイベントが集中している場所の神話生成のパワー、つまりは、生物としての生殖が可能なシンボリックな身体であった。

しかし、それだけで終わりではない。物語は、周囲に影響を及ぼす神話生成のエネルギーによる、新しく、そして、胸をわくわくさせるような図式の創造を楽しんでいるようだ。ルペリカルにほど近いアウグストゥス複合的な建物のふち、コンスタンティヌス帝の時代に、後に聖アナスタシアのバシリカ聖堂となる教会が建てられるその場所は、チルコマッシモ *Circus Maximus* にある皇帝謁見のための宮殿小屋 (*maenianum* とよばれる：アウグストゥス私邸の見取図を参照せよ) であった。その教会の位置は、四世紀においてのみローマの中心であって、家族とともにパラティヌスのアウグストゥス私邸を住居とした、最後のローマ再創造者コンスタンティヌスの時代に、最初のパラティヌス教区として現れた。したがって、カルディーニによると、のちにバリストア聖堂に祭られる聖人でなかったとしても、教会の創設者を皇帝の姉妹アナスタシアと識別することは論理的であるという。さらには、この資料が知らせるデータによると、またこの場所は、ニカエア会議の後、つまり326年12月25日に、ローマで最初のクリスマスが公式に祝賀された場所

であると推定することができる。そして、事実、既にミトラス神 Mithras の誕生と「不敗の太陽神」*Sol Invictus* の誕生に捧げられた冬至の日付と、キリストの誕生日を一致させようとしたのは、コンスタンティヌスだった。これによって、古代ルベリカル地区に建てられた教会において祝賀された最初のローマ様式のクリスマスと、地下聖堂において何世紀も祝賀されてきた昔からの「ローマのクリスマス」のあいだの完全なアイソモルフィズム<sup>10)</sup> がつくられた。一介の羊飼いと動物の洞窟の中でのキリストの誕生が、同じく原始的で神聖な、狼とファウストゥルスとアッカという羊飼いに守られた、洞窟のなかでのロムルス誕生と物理的にも重ね合わされている。カルディーニによると、アイソモルフィズムは、それに属する大部分のローマ貴族がコンスタンティヌスに敵対的であると特定されていた、古代の抵抗的な異教徒のカルトを吸収することによって解消しようとする、コンスタンティヌスの願望によって動機づけられている。更なるどんな推測もこえて、これらの一致には、深く驚かざるを得ず、むしろ衝撃をうける。ここに、イマーゴ・ウルビスとよんだものの、そして、場所とモニュメントのシンボリックな力の別の実証例がある。しかし、シンボルの力は、同じ尺度では測れない世界と歴史的時代のあいだでさえ、つりあいを課す能力を示す。そして、これは、我々が京都の例を通して示そうとするものだ。

### 3. 京都と理念的な極東都市の起源：地上の都市と天上の都市

最後に京都に戻ろう。この都市もまた、先史時代から有史時代への変化が起こった、文明の始まりの時代に対応して、都市というものの記憶を保存する「最初の街」であった。ただ、厳密には、これを言いきることはできない。実際に、平安京（「平和と平穩の首都」を意味する、京都の古代の名前）は、有史時代の中間、つまり桓武天皇によって794年に創設されたときに、一からおこされた。この新たな首都は、まったく同じ中国の都市モデルを使ってつくられた二つの首都、つまりは、要所を配向させた直交図面に基づき、そして、本来の意味で最初のふたつの日本の都市と認められる、奈良（平城京、710-784年）と藤原京（694-710年）にならうものであった。先史時代から歴史時代への移行と日本での最初の都市化は、五世紀からの、言葉と宗教（仏教）さらに中国建築と都市計画の国家への導入と、国家の中国化に対応する。しかしながら、平安京が前のふたつの首都の都市計画と違いがないことから、最初の日本の都市の忠実なイメージが、前ふたつの都市とのあいだのわずかな時間において、保存されているということができる。これらのイメージすべては、日本の他の都市のみならず、中国の歴史と都市化の起源でもあった、あるひとつの首都を追い求めることで影響をうけたものであった。それは、我々がローマにおいて観察したイマーゴ・ウルビスの復興と、一対をなすが反対の道である。そして、それはあらゆる文化と地理的の面において、古代都市の神聖な重要性を明らかにするものであった。

事実、京都は、それまでのもの以上に、名前においてさえ唐の首都、長安（中国語で「永遠の平和」を意味する）の精密なコピーである。八世紀にはローマが放棄され廃墟となった都市だったのに対して、この百万人もの住民に達した中国の都市は、その当時において、そして、産業革命前の全ての都市の歴史上、帝政時代のローマとならび、世界でもっとも人口が多い都市であった。ここには、これまでに記述してきた都市のあいだの、別のつながりがある。さらには、長安、つまり現在の西安が、考古学的な階層でしか残っていないのに対して、京都は1868年まで一千年間にわたり首都であり続け、さらに今でもオリジナルのレイアウトを非常に忠実にみることができる。このように、京都は、中国の主な都市の歴史のイマーゴを、つまりまた、最初のものであり、そして最も永続的なものでもあった、いくつかの王朝にわたる首都のイマーゴを、保持

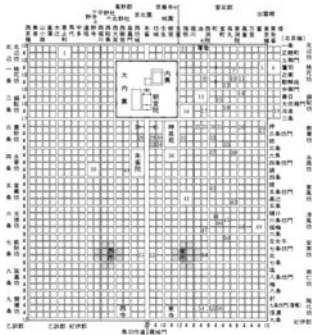


図15 平安京 794年から

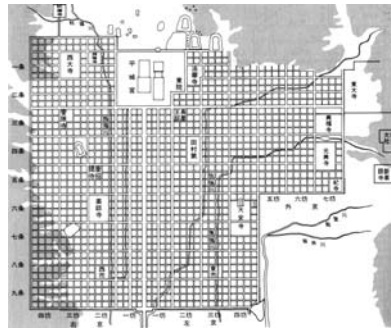


図16 平城京 710-794年

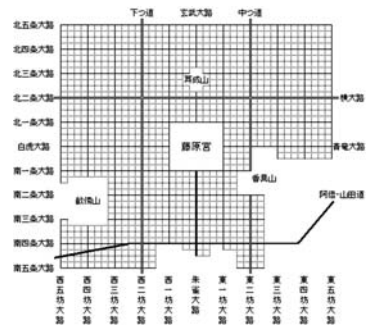


図17 藤原京, 694-710年

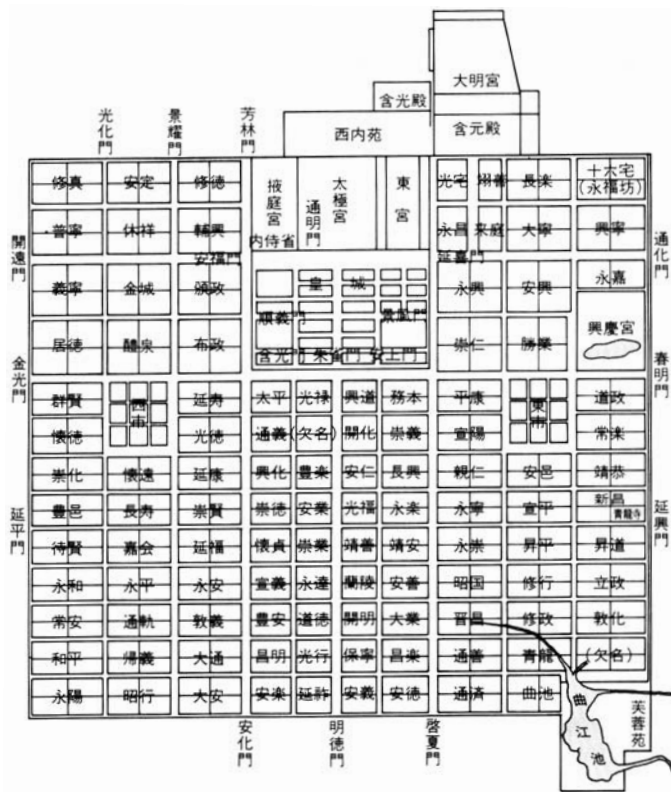


図18 長安

して直接に伝えている。

実際に、長安は、紀元前221年に始皇帝の命令のもと統一された最初の帝位のイメージを拡張した、全く同じ地域の咸陽（シエンヤン）になっている。この皇帝の副葬品である、世界的に有名な兵馬俑は、この都市の近くの、二千年以上も手つかずのままだった霊廟で発見された。そしてこのことは、ローマやギリシャ、中東のあらゆる場所でされてきたように、霊廟が公的な役割だけでなく、モニュメントとしての役割も果たしてこなかったという注目値する事実である。しかしながら、咸陽もまた、紀元前十一世紀にはじまる周

王朝の王都である鎬の継続であったので、新たな首都も、どこかしら古代の面影を残していた。われわれは、中国の歴史と都市化の最初の時代、つまりは、殷王朝の開始点に到着した。これらの場所はすべて、不十分な考古学的証拠であるにすぎないが、今日でも京都のイマーゴ・ウルビスは、都市モデルの忠実な痕跡のなごりを保ち続けている。そのなかに、統治者の宮殿をみつけることができる場所であり、また、都市のなかの都市に隠された神として、つまりは、偶然に中国で「禁じられた都市」と呼ばれたのではない、隠された世界としてみなされる場所でもあった、古代東洋の宮殿のような都市を認めることができる。そして、まさに、都市と生活の起源に対して解釈学的な力を周回させる皇帝の人物像は、典型的なインド・ヨーロッパの多神教の神話生成の傾向に従って、英雄的ではなく、むしろ、相当に抽象的でシンボリックな、儀式・博識における鍵として表現される。

古代中国思想は、現実のヴィジョンを、類似、対立、差異、そして、大宇宙と小宇宙、人間と自然の包括的な統一に基づく関係のシステムとして発展させてきた。世界は、正方形のかたちをしており、そして、宇宙を映すものであると考えられた。この形式は「中央の王国」と呼ばれ、そして地球の中心として起こった国そのものにも適用された。さらに、都市の形もまた、天なる大宇宙をうつす正真正銘の小宇宙だと考えられた。天上の皇帝そのひとは、国の理念的な中央位置を占領する。つまりは、皇帝の調和させる役割にそって、その座所と、たとえば四季、雨と風、陰と陽といった、拮抗する自然の力が一体となる場所に対応しなくてはならない。こうした首都は、国のイメージであり、また同様に、そこで中国が中心を占めている世界と宇宙のイメージでもある。宇宙の力を調停する支配者、至高の調和者は、その外側の領域には野蛮な闇の勢力が住んでいるとされた、文明世界の中心に置かれた首都の中心部に存在しなければならない。それはまた、理念的に天と地を接続する垂直軸が置かれる場所でもある。皇帝は、実際に、何よりも、そこで、人間の肉体的生命と政治的生命が創設される、天と地のあいだの調和の守護者である。これまでにすでにみたように、ギリシャ語とラテン語においても、皇帝は都市と宇宙のオンパロス *omphalos* であり、ウンビリクス・ウルビス *umbilicus urbis*、オルビス・アト・ムンディ *orbis et mundi*、つまり、それにより肉体的生命と政治的生命が創設される、天と地の調和の守護者であったといえる。そこでの概念は、人間が天と地のあいだの仲介者の役割を果たすとされる三位一体、天地人 (Tian-Di-Ren: 天上, 地上, 人間) という中国思想によっていた。さらに、そこには西洋のアクシス・ムンディとおなじアイデアを見出すことができた。そこでの皇帝はアクシス・ムンディとして、天と地を接続する普遍的な核心としての役割を体現している。しかしながら、それは生きたアクシス・ムンディであり、西洋文化でのように、記念的でもモニュメンタルでもない。その結果として、皇帝は、古代の易断の道具であり、そしてまた、三位一体を含む、多くの中国文化の考え方において反復のシンボルでもあった、亀と同一視される。丸い上部の甲羅は天上をあらわし、動物の内側は人間、下部の盾は地上をあらわした。収納可能な移動性を備えたその動物は、そのなかで絶対的な全潜在能力の状態を実現し、また、中心の純粋な厳格状態にする傾向をもち、さらに集団の原始状態に達することができるという、本当の人間の仲介する姿を体現することに適していた。そして、当然のこととして、皇帝の人物像は、「本当の人間」の状態を実現していた。

これらの全ての概念と都市の特徴は、それ以前の資料に基づき漢代に編集された儒教の古典『周礼』 *Chou-li* (周の儀式) のなかにみつけることができる。皇帝の都市は、形において正方形で、各辺は九マイルの長さであり、それぞれの辺には三つの門 (図版の略図では反転している) をもち、そして、東西南北にはしる九つの道は同時に九台の馬車の通行を許す広さでなければならなかった。これらはすべて、3とその倍数9に支配される明瞭な魔術的・宇宙的なインスピレーションをもち、一年間の月数と十二星座に対応する十二の

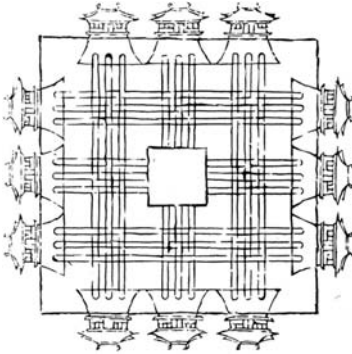


図19 周礼 理念的な都市



図20 洛書

4	9	2
3	5	7
8	1	6

図21 洛書の補足説明図

門をそなえた、数秘術に基づいている。

都市は、中心を取り囲んだ三つの地域に分けられる。実質的に、その都市の中心は、輝かしい光の大広間、つまりは明堂 *Ming Tang* を中央にもつ皇帝の宮殿である。実際に、丸天井と正方形の基盤を備えた、大広間の形は、そこで皇帝が三位一体の三番目の要素として配置される、亀の宇宙的シンボルを思い起こさせる。さらに、九つの正方形の部屋に分けられた、明堂の平面図は、中国の帝国領土が伝説的な皇帝、禹に起因して九つの行政区にわけられている（年代記によると紀元前2220年ごろに位置づけられている）ことと、そして、皇帝自身によって洛水からあらわれた亀の背中に初めてみられた『洛書』 *Lo-shu* とよばれる図面（『易経』に含まれる）を思い起こさせる。

これは、三つずつに配列された九つの数字を含み、もし加えるなら全ての線（横、縦、そして、斜め）において合計が15であることを条件とし、そして中央の数字5は、最初の九つの数字の直線配列において中央の位置の数値（5は、四つの数字に先行され、そして同じく四つの数字が続く）であることを特徴とする、中国の魔方陣である。同様に、そこに王が居住していた明堂の中央広間は、帝国の中央の行政区、つまりは王国の中央（後にその名称は中国全体にまで拡張される）に対応する。明堂それぞれの側面は、一年間の季節に対応し、さらには、その三つの門はそれぞれの月に対応する。また、それらの門は全てを一緒にすると、配列的な番号順において（明らかに図に示されたものとは異なり）、つまりは、時計回りに、北側に向かう東側に位置する最初の門から始まり時計回りの順序で、黄道十二星座となっている。考古学的証拠から再現された長安の明堂の平面図は、「周礼」の理念的モデルにしっかりと寄り添っている。

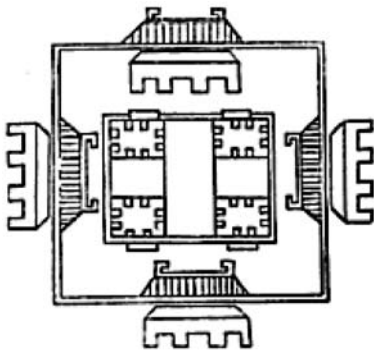


図22 明堂図

亀のいくつかの要素を思い起こさせる衣装を着た皇帝は、そこで執務を行う建物の扉に対して、その年の天文的モーメントに応じて配置される。一方で季節の循環的な時間をたどりながら、また一方で一年を通じて、支配空間すべてをシンボリックに経由する。そこで、至高の調和者、そして天と地の仲介者として、つまり生きたウンピルクス・ウルピス・エト・オルピスが、すべて外側に開いた12の開口部をもった建物の四つの壁のあいだで星のように軌道を描くという役割を明白に示す、シンボリックな周行をおこなう。

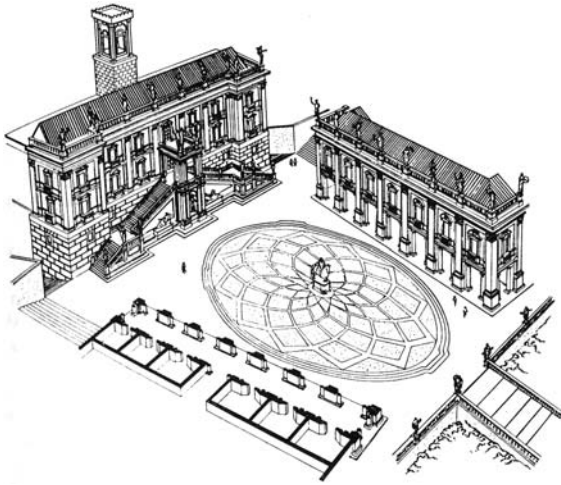


図23 ミケランジェロのカピトリノー広場



図24 マルクス・アウレリウスの像

ただし、周礼の都市モデルが、完全に文字通りには適用されることはなかったことには留意する必要がある。もっとも明白な違いは、漢の首都の明堂は中央ではなく都市の南側に配置されるという、不規則な平面図をもっていたことである。京都と奈良は、この長安のモデルを再現している。しかし先に述べたように、最初の中国モデルに基づいた最初の首都は694年から首都の藤原京であった。考古学的な調査によって明らかにされたパラドックスは、皇居（大極殿）を中央にもち、そして、直行する九つの道の特徴とする間取りをもつ、この都市は、中国の首都そのものより周礼の規則に、より忠実であったことだ！したがって、日本での最初の中国風の首都は、まさに「理想的都市」として、長安の歴史的な実例さえこえて、中国の都市計画における最も厳格な儀式的概念の象徴において誕生した。そのために、日本は、中国における証拠よりも、さらに有意義な証言を残すであろうことは重要である。

しかし、もしも、中国における首都のカピトリノーと定義できる明堂と、ミケランジェロのローマのカピトリノーを比較するならば、われわれが認識した「偶然の対応」はより重要である。明堂の12個の開口部は、ミケランジェロが理想的都市の床の楕円に囲んだ正確に菱形のデザインの12点に、さらに、マルクス・アウレリウスの像の台座が配置されている中央の星の12点に対応する。

西洋の古典的なモニュメンタルな言語のなかで認識し、明堂のなかにも全く同じ概念を見つけることができたのは、絶対的に明瞭な宇宙論的なエンブレムであった。このミケランジェロのエンブレムは、これまでにみえてきた、ムンドゥスーウンビリクス・ウルビス *Mundus-Umbilicus Urbis*、そして、ローマのフォルムの黄金の里程標を通して、そして、ローマ・クアドラータ *Roma Quadrata* とバラティヌスの丘のロムルスによるローマ創設の穴にさかのぼる、全く同じシンボルを、さらに理想的な言葉で表現している。それらは、ミケランジェロによって建設され、新たな理想的都市とともに、新しいキリスト教の形式で二千年以上後に再び現れる地上と天上の都市のシンボルとして、皇帝かつ哲学者であったマルクス・アウレリウスの古代の像に囲まれた、正方形の中心におかれる。それは、まるでミケランジェロがそれ以前のローマを再建したかのようであり、そして、都市は常に宇宙の鏡であり、天上の都市との関連で創設することができることの確認であった。つまりは、我々が冒頭で述べたように、実体は物質的であるまえに、非物質的であった。

さらにいえば、その広場の傍らの卵形のデザインは、円の完全な形だけを認めてきた千年来の偏見に対し

て、そのすぐあとにケプラーによって示される、天体の動きに即した、天の軌道の新しい楕円形を予告していたことを指摘できる。それは他方で、ギリシャ人にとっての世界と宇宙の中心のシンボル、デルファイのオンパロスの楕円形の形状を再現してもいた。それらの時代において、新たな太陽中心説の太陽が断言されてきたのと同様に、天上の都市の主権を有する星として、皇帝マルクス・アウレリウスは、彼の場合は知恵による啓蒙によってであるが、周りを回る地上の都市の光を明るく照らした。つまり、彼は公正な政府と、それぞれの特別または個人的な関心から同距離であることのシンボルであり、そして、その普遍的な守護者であった。そして、これこそが空間と時間においてとても離れた明堂と、ミケランジェロによるローマのカピトリノという、2つのシンボリックな小宇宙のあいだの最後の驚くべき対応点であった。つまりは、我々は同じく原型、つまりは天地人の三位一体をみつけることができた。実際に、両方の「カピトリノ」の中心には、二人の皇帝、天と地のあいだを接続する点としての二人の人間、アクシス・ムンディを通過する二つの点がある。つまり、そのことは、エウノミア *eunomia*（良い政府）として、最高のレベルにまで設計された二つの市民の力の顕現であった。全ての人間の技能の中でも、政府そのものが、最も困難で必要なものであったために、その保障は、地上の都市の市民地域にある人間の社会的生活にもとづいて創設されたのだった。

#### 訳注

- 1) 再利用のために消去されてはいるものの、それ以前に書かれていた内容を読むことのできる羊皮紙のこと。
- 2) ローマ七丘の一つ、あるいは、そこにあった広場のことを指す。古代ローマにおいてはラテン語でカピトリヌスと呼ばれていた。その後は、イタリア語でカンピドリオあるいはカピトリノと呼ばれる。ローマ七丘の一つ、あるいは、そこにあった広場のことを指す。
- 3) 古代ローマでのカピトリヌスに同じ。
- 4) フォルム・ロマヌム。古代ローマの公共広場のこと。イタリア語では Foro Romano フォロ・ロマーノと呼ばれていた。
- 5) 古代ローマ領内の全ての街道の起点とされたもの。
- 6) イタリア語読みでは、バラティーノの丘。
- 7) Heinrich Schliemann：トロイア遺跡の発見業績で有名な一九世紀ドイツの考古学者のこと。
- 8) ローマ神話におけるかまどの女神のこと。
- 9) カピトリノに同じ。
- 10) Isophormism：異なる起源を持ちながら同じ形態をしているもののこと。

#### 参考文献（原著者）

Ackerman, J.S.

1988 *The Architecture of Michelangelo*, 2 vols., London/New York.

Carandini, A.

2003 *La nascita di Roma. Dèi, lari, eroi e uomini all'alba di una civiltà*, Torino, Einaudi.

2006 *Remo e Romolo. Dai rioni dei Quiriti alla città dei romani*, Torino, Einaudi.

*La leggenda di Roma*, volume I, *Dalla nascita dei gemelli alla fondazione della città*, Milano Mondadori-Fondazione Valla.

2007 *Roma, il primo giorno*, Bari, Laterza.

- 2008 *La casa di Augusto. Dai lupercalia al Natale*, Bari, Laterza.
- 2009 *La leggenda di Roma*, volume II , *Dal ratto delle donne al regno di Romolo e Tito Tazio*, Milano, Mondadori-Fondazione Valla.
- 2011 *La leggenda di Roma*, volume III, *La costituzione*, Milano, Mondadori-Fondazione Valla.
- 2012 *Atlante di Roma*, Milano, Electa.

Childe, V.G.

- 1950 *The Urban Revolution* *Town Planning Review* 21:3-17.

Corradini, P.

- 2001 *La città cinese*, in *Modelli di città*, a cura di Pietro Rossi, Torino, Edizioni di Comunità.

Eliade, M.

- 1949 *Cosmos and History: The Myth of the Eternal Return*, translated: W.R. Trask. Princeton, NJ: Princeton University Press, 1954. Originally published as *Le Mythe de l'éternel retour: archétypes et répétition*, 1949.
- 1957 *The Sacred and the Profane: The Nature of Religion*, translated from French: W.R. Trask, Harvest/HBJ Publishers.

Granet, M.

- 1934 *La pensée chinoise*, Paris, Albin Michel.

Guénon, R

- 1946 *La Grande Triade*, Paris, Gallimard.

Mazzei, F.

- 2001 *La città giapponese*, in *Modelli di città*, a cura di Pietro Rossi, Torino, Edizioni di Comunità.

Needham, J.

- 1954- *Science and Civilisation in China*, Cambridge University Press.

Plutarchus

*Vita Romuli.*

Rykwert, J.

- 1963 *The idea of a town: The Anthropology of Urban Form in Rome, Italy, and The Ancient World*,

Takahashi Yasuo, Yoshida Nobuyuki

- 1989-90 高橋康夫, 吉田伸之編「日本都市史入門」全3巻, 東京大学出版会 (*Introduzione alla storia delle città giapponesi*, 3 voll., Tokyo, Tokyo University Press)

図版出典一覧

- 図1. [http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Bulle\\_d%27or\\_de\\_Louis\\_IV\\_de\\_Bavi%C3%A8re.jpg](http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Bulle_d%27or_de_Louis_IV_de_Bavi%C3%A8re.jpg) パブリック・



ドメイン

- 図2. [https://it.wikipedia.org/wiki/File:Piazza\\_del\\_Campidoglio\\_Roma.jpg](https://it.wikipedia.org/wiki/File:Piazza_del_Campidoglio_Roma.jpg) パブリック・ドメイン
- 図3. <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:KyotoCity1789.JPG> パブリック・ドメイン
- 図4. 高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門Ⅰ空間』東京大学出版会, 1989年, 209頁.
- 図5. [http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Naiku\\_01.JPG](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Naiku_01.JPG) クリエイティブ・コモンズ 表示—継承 (権利者: N yotarou)
- 図6. E.Gjerstad. *Early Rome*. Lund, 1953-73, Vol.6, IV.46.
- 図7. [http://it.wikipedia.org/wiki/File:Roma\\_Septimontium\\_PNG.png](http://it.wikipedia.org/wiki/File:Roma_Septimontium_PNG.png) クリエイティブ・コモンズ 表示—継承 (権利者: Cristiano64)
- 図8. Museo nazionale romano, Italy. Soprintendenza archeologica di Roma. Roma: *Romolo, Remo e la fondazione della città Cataloghi di mostre. Archeologia*. Ministero Per i Beni e le Attività Culturali, 2000, p.263.
- 図9. R.Bussi, *Misurare La Terra: Centuriazione E Coloni Nel Mondo Romano Citta, Agricoltura, Commercio Materiali Da Roma E Dal Suburbio*, 1985, p.142.
- 図10. [http://en.wikipedia.org/wiki/File:Umbilicus\\_urbis.JPG](http://en.wikipedia.org/wiki/File:Umbilicus_urbis.JPG) クリエイティブ・コモンズ 表示—継承 (権利者: Karlheinz Meyer)
- 図11. <http://en.wikipedia.org/wiki/File:RomaForoRomanoMiliariumAureum01.JPG> クリエイティブ・コモンズ 表示—継承 (権利者: MM)
- 図12. [http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Templo\\_of\\_Apollo\\_Delfi.jpg](http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Templo_of_Apollo_Delfi.jpg) クリエイティブ・コモンズ 表示—継承 (権利者: Ifernyen)
- 図13. [http://en.wikipedia.org/wiki/File:Omphalos\\_museum.jpg](http://en.wikipedia.org/wiki/File:Omphalos_museum.jpg) クリエイティブ・コモンズ 表示—継承 (権利者: Юкатан)
- 図14. [http://it.wikipedia.org/wiki/File:Capitoline\\_she-wolf\\_Musei\\_Capitolini\\_MC1181.jpg](http://it.wikipedia.org/wiki/File:Capitoline_she-wolf_Musei_Capitolini_MC1181.jpg) パブリック・ドメイン
- 図15. 高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門Ⅰ空間』東京大学出版会, 1989年, 209頁. (図4と同一)
- 図16. 高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門Ⅰ空間』東京大学出版会, 1989年, 211頁.
- 図17. <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Fujiwarakyo2.gif> パブリック・ドメイン
- 図18. 高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門Ⅰ空間』東京大学出版会, 1989年, 213頁.
- 図19. Leonardo Benevolo, *Storia della città orientale*.
- 図20. 村山宗隆『新九星人間占い』文芸社, 2004年, 19頁.
- 図21. 翻訳者作成
- 図22. 物集高見『廣文庫』廣文庫刊行會, 1916年, 54頁. (<https://play.google.com/store/books/details?id=2558pHnekr0C>)
- 図23. [http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Michelangelo\\_Buonarroti\\_Piazza\\_Campidoglio.jpg](http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Michelangelo_Buonarroti_Piazza_Campidoglio.jpg) パブリック・ドメイン
- 図24. <http://it.wikipedia.org/wiki/File:MarcAurelio.jpg> クリエイティブ・コモンズ 表示—継承 (権利者: Beatrice)